

歯科衛生士の就業継続意思に影響する要因
—外的・内的キャリアとの関連性—

上浦 環

松本歯科大学 大学院歯学独立研究科 健康増進口腔科学講座
(主指導教員：小笠原 正 教授)

松本歯科大学大学院歯学独立研究科博士（歯学）学位申請論文

Factors involved in intention to continue employment in dental
hygienist : Relationship with external carrier / internal carrier

TAMAKI KAMIURA

*Department of Oral Health Promotion, Graduate School of Oral Medicine,
Matsumoto Dental University
(Chief Academic Advisor : Professor Tadashi Ogasawara)*

The thesis submitted to the Graduate School of Oral Medicine,
Matsumoto Dental University, for the degree Ph.D. (in Dentistry)

歯科衛生士の離職防止を目的に、内的キャリアとキャリア・アンカー、内的キャリアと職場の実情、および外的キャリアについて歯科衛生士の就業継続意思と関連する要因を多変量解析により明らかにした。

対象は、長野県内の病院、歯科医院に就業中の歯科衛生士とし、2018年5月～11月に開催された長野県歯科衛生士会主催研修会に参加した者61名及び病院勤務の歯科衛生士45名、計106名であった。

調査は、無記名自記式質問紙法を行った。研究の実施に際し、直接回収の場合はあらかじめ対象者に対し「歯科衛生士の就業継続に関するアンケート」（説明文書）に基づき、研究内容について十分説明し、本人の自由意思によるアンケート記載と提出をもって同意とした。郵送の場合は、説明文書、アンケート用紙、回収用封筒を送付

し、回答後の返送をもって同意とした。

調査内容は、就業継続意思、外的キャリア、Edgar. H. Scheinのキャリア・アンカーセルフ・アセスメント¹⁾による内的キャリアとキャリア・アンカー、内的キャリアが現在の働き方や職場で当てはまるか、とした。

分析方法は、就業継続意思について「あり」と回答した者を「継続意思あり群」、 「いずれ辞めたい」「今すぐ辞めたい」と回答した者を「継続意思なし群」の2群に分けた。内的キャリアは、3点以上（「たいていあてはまる：3点」、 「いつもあてはまる：4点」）をその人にとっての内的キャリアと定義し「該当群」とした。2点以下（「まったくあてはまらない：1点」、 「たまにあてはまる：2点」）を「非該当群」とした。内的キャリアと職場の実情との一致は、内的キャリアが「該当群」で、なおかつ「はい」と回答した項目を

「一致」、それ以外を「不一致」とした。次に、就業継続意思の有無と、外的キャリア、内的キャリア、キャリア・アンカー、内的キャリアと職場の実情との一致の関連性を、 χ^2 検定あるいは Fisher の直接確率計算を用いて分析した。次に、就業継続意思と有意な関連性が認められた項目間の独立性を検討した（多重共線性）。独立性が認められたものを独立変数とし、就業継続意思を従属変数としてロジスティック回帰分析を行った。統計処理は SPSS Ver.23.0を用い、5%未満を有意差ありとした。

その結果、就業継続意思に関連がある要因は「自分自身、家族、仕事、それぞれのニーズが同時に満たされている（調整オッズ比0.11：95% CI 0.02~0.60）」であった。

今回の分析では、3つのニーズをバランスよく調和させて実現することが必要な要件であり、そのうちの1つが欠落していても就業継続にはならないことが明らかになった。言い換えれば、この研究は、仕事と生活のバランスが継続的な雇用にとって重要であることを明らかにした。

歯科衛生士の就業継続のために、管理者である歯科医師は歯科衛生士のワークライフバランスを考慮する必要がある。歯科衛生士自身が職務を遂行し、家庭や地域社会における生活の各段階に応じてさまざまなライフスタイルを選択し、実現できるようになれば継続的な就業につながる。歯科医師、歯科衛生士の両者がそれらの要因を考慮する必要があることが示唆された。